令和５年度全国学力・学習状況調査における

北九州市立　　門司　　中学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、令和５年４月１８日（火）に、３年生を対象として、「教科（国語、数学、英語）に関する調査」と「生徒質問紙調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にしていただきたいと思います。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

１．調査の目的

⑴　義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。

⑵　学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。

⑶　そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

２．調査内容

⑴　教科に関する調査（国語、数学、英語）

教科に関する調査（国語、数学、英語）
①　身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等 ②　知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等に関わる内容

※調査では、上記①と②を一体的に問うこととする。

⑵　生徒質問紙調査

生徒質問紙調査
○学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

３．教科に関する調査結果の概要

(1)　全国・本市の学力調査（国語、数学、英語）の結果

本年度の結果	国語		数学		英語	
	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率
本市	10.3	69	7.3	49	6.8	40
全国	10.5	70	7.6	51	7.7	45

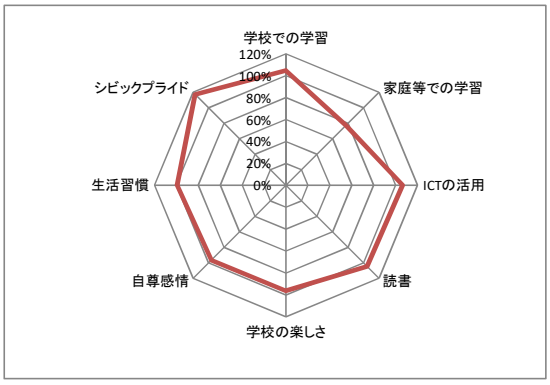
(2)　本校の学力調査結果の分析

国語	全体的な傾向や特徴など	正答率分布グラフを全国と比較すると、全体的にグラフがやや上位（右）に偏っている傾向である。特に、低得点者の割合が少なく、中位層の生徒がやや多い傾向にある。	全国平均正答率との比較 上回っている
	よくできた問題	意見と根拠など情報と情報との関係について、理解し記述する問題。	
	努力が必要な問題	文脈に即して漢字を正しく書く問題	

数学	全体的な傾向や特徴など	正答率分布グラフを全国と比較すると、全体的にグラフがやや下位（左）に偏っている傾向である。また上位層が少ない。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	自然数の意味や累積度数の意味を理解しているか問う問題。	
	努力が必要な問題	ある事柄が成り立つことを構想に基づいて証明する問題。	

英語	全体的な傾向や特徴など	正答率分布グラフを全国と比較すると、全体的にグラフが全国より下位（左）に偏っている傾向である。また上位層・中位層共に少ない。	全国平均正答率との比較 下回っている
	よくできた問題	日常的な話題について、短い文章の概要をとらえることができるかを問う問題。	
	努力が必要な問題	情報を正確に聞き取ることができるかを問う問題。	

４．学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問紙調査結果の概要



質問紙調査の結果分析

- 「今住んでいる地域の行事に参加している」「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思う」との問いに対して、全国と比較して、肯定的な回答が多く、地域行事への参加や地域についての調べ学習などがシビックプライドの醸成へとつながっと考えられる。
- 「家で自分で計画を立てて勉強をしていますか」との問いに対しての肯定的な回答の割合が低い。また、家庭学習の習慣が身についている生徒の割合も全国と比較して、低いことがわかる。今後継続して、家庭学習の方法を示したり、学校の隙間時間を利用しての補充学習等を充実し、主体的に学ぶ態度を育成したい。

５．調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

①　教科に関する取組

根拠をもとに説明したり、理由を説明する力を育成するために、授業内での話し合い活動や書く活動を授業の中で多く位置付ける。また、知識・技能の能力を向上させるために、タブレットを用いたドリル学習や問題集の取組を繰り返し行う。

②　家庭生活習慣等に関する取組

家庭等での学習習慣を身に付けさせるために、各教科で家庭学習の課題を提示する。また、スマートフォンの適正な活用と家庭学習の大切さについて啓発していく。